



昭和49年(1974年)

9月号(No. 351)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 100円

目次

本文

「連峰スカイライン」反対、要望
書と意見書を提出

-自然保護委員会.....(2)
- 要望書.....(2)
- 自然公園道路計画に関する意見.....(2)
- 山梨県知事宛文書.....(3)
- 山梨県よりの返事.....(4)
- 自然保護憲章.....(3)
- UIAA 総会に出席して ②.....(4)
-鈴木郭之.....(4)
- エベレスト峰南西壁(南壁)登山
計画.....宮下秀樹.....(5)

随想・研究

- 山の緑盛りなり.....藤島 玄.....(1)
- 噴火の島海.....岡部みち子.....(2)
- 会津の山②「高旗山」.....市村貞夫.....(5)

海外からのたより

- カラカスより.....吉沢一郎.....(6)

その他

- 深田久弥氏の「のれん」.....(1)
- 消息.....(7)
- 『山岳』第68年について.....(7)

山の緑盛りなり

藤 島 玄

秋田の和賀岳、乳頭山について会津の西吾妻山に登った。梅雨期の山は旺盛な新緑に埋れていた。この両山脈は昭和十二、十三年の訪れとちつとも変らず、空から俯瞰したニューギニアの原生林のようである。太古以来の日本人の幾百代にもわたって、良しと見て心に決めて引き継いで、合掌してきた共同体の山の姿が、幾重にも緑を積み込ませ重なり合っている。

交通路の思い切った開発があつて、そこに初めて人間の息吹きが通い、美しい自然との対面があり、地獄の社会生活との融合が生れる。現にわれわれもそれを効果的に使つてここに立たれた。しかし、その開発によつて山の原生が破壊され、生物は裸にされた環境に滅亡しようとし、山村民は生活の場を失ない途方にふれてはいる。

一方、自然保護の叫びは高い。自然開発と自然保護の二律背反の事実は、両者を全く異質のものとして混同すべきでないと考えられた。自然を荒廃に

和 賀 岳

導くものは低劣なモラルの仕業であつて、これは社会教育の昂揚と、個人の自覚をまつ以外に永遠に解決の道はあるまい。日本人のモラルの上昇によつて、長い年月を費しても、この美しい自然の繁栄が再び現われることを確信した。減るべくして亡びるもの、開くべくして開いて、自然と人間の融合した豊かな生活をかちとるために、人間はもっと謙虚であれば、自然は速しく速かに復元する。そのバランスをとるのが政治である。

滝倉山荘の夜半、電光雷鳴物凄い大雨が過ぎてゆく。山林の静けさをバックに、トゥーンとぶなの実がトタン屋根へ落ちては破る。

奇怪な秋田行「天の川」寝台専用列車は六日朝の始発上野駅で売切れ、念のため千葉駅で乗換、新潟駅ではもちろん新発田駅まで前夜の十時までに枯ったが乗車券まで発売しない。最後の手段

入場券で乗車、ガラ空きの朝っぱらに終着駅までの寝台券を買わされた。十五日、飛行機で来た今西会長と落合つて、大曲駅から秋田支部の車で太田町へ入り標高約八二〇mの山荘へ入った。長方形の鉄骨二階建、簡明瞭な快適な無人小屋。ストーブを焚つけ、まずは祝金となった。

十六日、和賀岳往復の日だ。ふな林を抜けて薬師岳へでた。火山岩礫が草原に小高い頂上の颯々たる霧の渦巻に、薬師の石仏も寒むそだ。道は変つて緩い起伏の頂後となり、草原と短かい竹藪が被っている。東は和賀岳、西は白岩岳の丁字路から草が刈つてある。小鷲倉(薬師平)の断崖台地に長い雪渓が末端を池へ突こんでいた。ここから頂上部へかけての地形と植生が、北海道の千軒岳にそっくりだ、と会長と語り合った。

和賀岳の一等三角点はコンクリートに厚く囲まれ義歯のようだが、チングルマの首飾を霧に揺がせていた。鐘ビールとバンザイには、途中で幕営して待つていた婦人会員二名も加わっていた。薬師平に戻ると藁と蛇の骨が散乱していた。イヌワシの仕業であろう。山筋探りの人達が小屋に休んでいた。エゾハルゼミの啼くふな林を下って車へ戻った。

乳 頭 山

三時すぎ出発、田沢湖東岸をすぎ、二時間で乳頭温泉郷の大釜温泉へ入った。なるほど秋田、大曲、角館と、いわゆる秋田美人がウヨウヨいた。美人の本場は京都をもつて任ずる会長も、越後美人の産地の私も目をむいた。

十七日、乳頭山から秋田駒ガ岳は曾遊の山。『山』に発表も多い。物いわぬ美人の植生に眼を転じよう。乳頭山直下にムシトリスミレの群落を見た。飯豊連峰は三株、五株と数えるほどしか残っていない。さらに驚いたのは田代岱山荘から田代池周辺に広がる草原にヒナウスユキソウの大群生があり、白一色のお花畑にハクサンチドリ、紫紅花が鮮やかな彩りを添えてまさに天上の楽園という規模を備えていた。

会長は笹森山を往復して往路を、秋田美人連れのわれわれは田代岱道を下った。車は田沢湖を半周して湯尻のレイクサイドホテルに横付け、アベック皇太子の部屋に案内された。

十八日、湖畔を打つ小波と加熱の燃焼音に目覚め、盛岡市から八幡平、焼山へ向う会長と別れて、私は山形支部を廻って帰った。

西 吾 妻 山

里は紫陽花、山は栗の花盛りの六月三十日、西吾妻山に登った。梅雨空に曇り小雨も降ってきた。インソツジ、ワタスゲ、ツガザクラはまだよい。ヒナザクラの小群生には吃驚した。荒川を境にして朝日連峰はヒナザクラ、飯豊連峰はハクサンコザクラと断絶しているとはかき思っていた。飯豊を飛び越し、峰つぎとはいいい吾妻に咲いていようとは。ヒナザクラ分布の南限かと思ひ、秋田支部の悲情を想うて改めて感謝したのであった。

(四十九年七月十日)

深田久彌氏の「のれん」

深田久弥氏の句入り「のれん」を作りました。

翩 なる

大 窓

小 窓

風 薫 る

九 山

と書かれたもので、深田さん独特の風格のある書体でそのまま染め抜いた「のれん」です。

頒価千円(送料、荷作り料六十円)です。本会ルームあて早目にお申し込み下さい。

会費をお納め下さい

■自然保護委員会■

「連峰スカイライン」反対

要望書と意見書を提出

自然保護委員会は、昨年度に引続き「連峰スカイライン」反対を中心目標に掲げ（四月二十二日 総会承認）、七月十六日付で山梨県知事宛、会長名で左記要望書・意見書を提出した。

なお、このことについては、山梨県会議長、県政記者クラブ、環境庁自然保護局長、同記者クラブなどにも連絡し、強く世論に訴えていく方針である。

同委員会では、さらに山梨県知事との会見も考えており、その文書ならびに山梨県からの回答もきているので別掲した。

要 望 書

拝啓
時下益々御清祥の段お喜び申し上げます。
さて本会は明治三十八年創立以来、

自然尊重を重視して参りました。古くは大正十年の尾瀬沼発電問題、昭和十年の富士山ケーブル問題から、最近では屋久島・上高地・尾瀬・大雪山などにおける自然破壊に対する活発な反対運動を続けて来ております。本年度の活動方針として、昨年度に引続き所謂「連峰スカイライン計画」または「自然公園道路」を主要目標として反対運動を行うことが四月二十二日の会員総会において決定されました。

かつて本会の大先輩達、あれ程愛された奥秩父の美しい自然は今や見る影もなくなりました。

ここが国立公園に指定（昭和二十五年）されたのは「代表的な日本の景観―原生林と溪谷の織りなす繊細な自然美―と豊富な動植物相」のためであった筈であります。

五月十八日から三日間、（織内副会長、山本理事）本会役員において、最終の実地検分を行いました。その結果、破壊の進行は秩父の昔を知る者にとって、目を蔽わしめるていのものであることを改めて確認致しました。しかも開発の手は今なお進行中であります。

われわれはこれ以上の自然破壊を断じて許すことは出来ません。祖先達が大切に守って来た日本の自然を、我々の世代において荒廃に帰せしめる権利は何人にもない筈であります。ここに本計画の中止を強く要望致します。

昭和四十九年七月十六日

日本山岳会 会長 今西錦司

山梨県知事 田辺国男殿

なお説明書および「山」三二八号、三四四号を添付致しましたので、我々の意のあるところをよろしく御諒察下さい。

昭和四十九年七月一日
自然公園道路建設計画
に関する意見社団法人 日本山岳会
自然保護委員会

我々は、かけがえのないこの美しい日本の自然を守る」という自然保護の原点からの発想に基き、常に便益第一主義に反対し続けてきた。

古くは大正十年以来問題となった尾瀬・尾瀬ヶ原での水力発電問題、昭和十年富士山ケーブル計画反対、昭和三十三年西穂高ケーブル計画反対、そして最近では、本会が自治体の首長に対して計画の中止もしくは変更に関する要望書を提出し、その建設反対を世に訴えるのは西穂高ケーブル計画問題以来のことである。奥秩父連山は古くから関東甲信地方の人々に親しまれてきた日本を代表する有数の山群である。

この由緒ある奥秩父連山の平均標高一四〇〇m地点に観光道路を建設するという発想は便益第一主義思考以外の何物でもない。

もしこの考え方で計画が実施に移されるならば、立山アルペンルートや石鎚山スカイラインや富士山スバルライン上部に見られる如く、その結果は各種の激しい自然破壊を生み、続いて第二次、第三次破壊を惹起し、我国の誇るこのかけがえのない奥秩父山系の自然はいたるところで均衡が破られ、その自然は再びもとに復することはないであろう。われわれはこのことを深く憂慮するものである。

そこで、次の通り、道路建設計画の中止を要望する。

【発想転換への勇気ある決断を！】
自然保護憲章にもうたわれている通

りこれまでの開発一辺倒政策から自然重視政策への転換期にある今日、これまでの経済重視政策への反省の上に立つて、為政者として、この時代の要請に適切に対応され、当該計画中止という、勇気ある決断を切に希望するものである。

この決断は決して反対運動などに屈したものとはならない。あくまでも積極的な新時代への対応姿勢として高く評価されるべきであらう。

今や日本中の自然は日本人共通の財産である。より巨視的観点に立った国家的判断による国土利用区分がなされなければならない。そして、今後は民族の財産としての自然のより長期的な保全というものを考えねばならないと

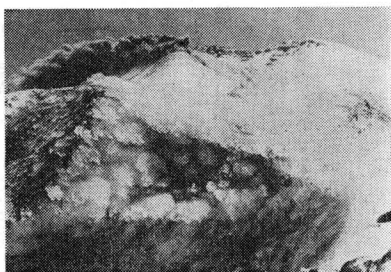
噴火の鳥海

岡部みち子

鳥海の噴火のニュースが入ったのは三月一日でした。以来登山禁止となっていて、私は遠慮してまだ登っていませんが、畠中善哉さんはもう居座られず二度も登られました。その都度お話を伺がっています。千蛇谷は怖ろしくおられないなかつたと言っています。

写真は四月二十八日の快晴、御浜より鳥海の頂上部を、畠中さんの撮影であります。二度目は最近でまだ写真は見ませんが、雪も大部とけて、植物の様子など多少わかったそうです。お話によりますとベニバナワウメは全滅。チヨウカイフスマは一部残っている、というの外輪山の伏拝岳、行者岳の手前辺りまで降灰がなかったからだそうです。風向きが関係で遊佐町側には煙は流れてきません。

四月二十八日以来、二ヵ月間ほと



（4月28日御浜より

畠中善哉氏撮影）

んど静まっており、ブルーラインも開通して賑わっています。畠中さんは七月下旬に行かれますので、その時は同行したいと思ひます。

今西会長も今夏お出なさるそうですが、その時声をかけましよう、仲間と相談して楽しみにしています。

今や時代は、自然保護の時代ではなくて、民族として、自然防衛を考えねばならぬ時代に入りつつあると考える。

【過保護の利用施設は国民を墮落せしめる】

金儲け主義による観光道路建設により、なすべく楽に、苦勞せずに「入手できる自然などはすぐあきらめてしまふ」という事実を認識しておかねばならない。

山地には山地特有の利用方法がありそこへ行きたければ遊歩道または登山道を自分の足で訪ずるのが基本である、と考える。このことは何も山地を山の好きな人達だけのグラウンドにしておこうと、いつているのではない。車は、山地を足で歩く意志のない人々でも簡単に山奥へ運び込む。その結果、観光客の増加が必然的に自然破壊

を招くことになるというのを今更述べるまでもあるまい。自動車道路が出来れば、一本一草をみづめながら自然の中を額に汗して歩むことによる、自然との対話の習慣がうしなわれ、真の自然を忘れた横着な人間の増加すること、民族の墮落といえよう。そして、その道路の周辺に各種の施設が出来るとなれば、まさに奥秩父も都会の延長となり、健全な人間にとっては過保護的利用施設といわざるを得ない。

自然荒廃が議論されるたびに利用者のマナーが挙げられるが日本人の観光地利用者の精神的貧困、即ち「自然保護道徳の貧困性」を証明する例は数多い。

その考え方にピンからキリまでである観光客に自然尊重のマナーを期待する方が無理である。しばしば言われるように観光道路を

自然は、人間をはじめとして生きとし生けるものの母胎であり、厳密で微妙な法則を有しつつ調和をたもつものである。

人間は、日光、大気、水、大地、動植物などとともに自然を構成し、自然から恩恵とともに試練をも受け、それらを生かすことによって、文明をきずきあげてきた。

しかるに、われわれは、いつの日からか、文明の向上を追うあまり、自然のとうとさを忘れ、自然のしくみの微妙さを軽んじ、自然は無尽蔵であるという錯覚から資源を浪費し、自然の調和をそこなってきた。

この傾向は近年とくに著しく、大気の汚染、水の汚濁、みどりの消滅など、自然界における生物生存の諸条件は、いたるところで均衡が破られ、自然環境は急速に悪化するにいたった。この状態がすみやかに改善されなければ、自然をとうとび、自然を愛し、自然に親しもう。

自然は、人間の精神は奥深いところまでむしばまれ、生命の存続さえ危ぶまれるにいたり、われわれの未来は重大な危機に直面するおそれがある。しかも、自然はひとたび破壊されると、復元には長い年月がかかり、あるいは全く復元できない場合さえある。

今こそ、自然の厳肅さに目ざめ、自然を征服するとか、自然は人間に從属するなどという思いあがりやを捨て、自然をとうとび、自然の調和をそこなうことなく、節度ある利用につとめ、自然環境の保全に国民の総力を結集すべきである。

よって、われわれは、ここに自然保護憲章を定める。

自然をとうとび、自然を愛し、自然に親しもう。

自然をとうとび、自然を愛し、自然に親しもう。

自然保護憲章

建設しても、その管理運営のいかんによって開発と保護の調和をはかることができないという考え方は単なる言い逃れに過ぎない。

諸外国の国立公園の例をみても日本よりは公衆道徳に一段と優れた社会とみられる米国やカナダでさえも、国立公園や国定公園への自動車の乗入れは、はっきりと禁止の方向にあり、最近では徒歩利用者の数も制限を加えはじめているほどである。

こういう世界的な自然保護重視政策気運に我国だけがいつまでも逆行していてもよいはずはない。このあたりで限りある地球上の貴重な自然の利用の仕方をも根本的に考え直す時期にきているのではない。

【自然公園道路建設計画修正への提言】

自然に学び、自然の調和をそこなわないようにしよう。

美しい自然、大切な自然を永く子孫に伝えよう。

一 自然を大切に、自然環境を保全することは、国、地方公共団体、法人、個人を問わず、最も重要なつとめである。

二 自然は、全人類のため、適切な管理のもとに保護されるべきである。

三 開発は総合的な配慮のもとで慎重に進められなければならない。それはいかなる理由による場合でも、自然環境の保全に優先するものではない。

とはいえ我々はいつまでも、どこでも、自然に絶対に手を加えるべきではない、といっているのではない。

誤解を避けるためにここに一つの具体的な提言を行なう。それはもしどうしても道路を建設するのであれば、真の過疎地域対策とも兼ねて、標高九〇〇〜一、〇〇〇m以下に、秩父山系を取り巻くような形の山麓周遊自動車道路を建設する計画に変更してはどうか、そして、周遊道路より高い処へ行くためには、いくつかの拠点から遊歩道を完備して、おのおの自然の中へ溶け込むよう設置されている利用施設へゆっくり歩きながら訪ずれるようにすべきではないか。

歩くのがいやだという人は始めから遊歩道へは足を踏み入れないことだ。既に車でできる観光地も数多いことであるから、自然の奥深くまで分け入るころからはじめ、家庭、学校、社会それぞれにおいて、自然についての認識と愛情の育成につとめ、自然保護の精神が身に付いた習性となるまで、徹底をはかるべきである。

五 自然を損傷したり、破壊した場合は、すべてすみやかに復元につとめるべきである。

六 身かなるところから環境の浄化やみどりの造成につとめ、国土全域にわたって美しく明るい生活環境を創造すべきである。

七 各種の廃棄物の排出や薬物の使用などによって、自然を汚染し、破壊することは許されないことである。

八 野外にゴミを捨てたり、自然物を傷つけたり、騒音を出したりすることは厳に慎むべきである。

九 自然環境の保全にあたっては、地球の視野のもとに、積極的に国際協力を行うべきである。(四九、六、五)

四 自然保護についての教育は、幼い

これは自分の足でしかできないという古来からのパターンをくずさないで、各種の施設を完備する方式こそ、これからの自然利用の基本とすべきでありもし貴県においてこの方式を採用されるならば、全国に先がけて、時代の先取り感覚で模範を示される栄誉は末代まで高く評価されることになる。

ともかく今日の自然に対する価値観や利用目的の多様性、自然観の混迷などが、世界でもっとも激しい自然破壊の急速に進行している日本の特色となっている現在、従来の行掛りに捉われず原点に立ち戻った自然保全を再考されることを切望する。

以上

拝啓
本日(七月七日)知事宛の要望書を発送致しました。

つきましては本件に関し、本会の意見を御説明申し上げたり或いは知事の御意見を伺ったり致す機会を得たいと存じます。

御多用中恐縮に存じますが、よろしく御高配を賜わりたく右御願ひ申し上げます。なお日時につきましては勝手ながら二つほどの機会を御教示頂ければ幸甚に存じます。当方にて会長、副会長、自然保護委員長、自然保護担当理事の間で調整しつづれに決定し早速お知らせしたいと思います。

日本山岳会会長 今西錦司
山梨県庁秘書課長殿

開発号外
昭和49年7月29日
日本山岳会会長 今西錦司殿
山梨県企画調整局長
望月幸明

拝復、お手紙拝見いたしました。常

通すからといっていた。

総会の席をかりて、パミールの国際

部屋までとつてくれた。途中、バスが一台故障したとかで、大分遅れて、全員が着いたが、部屋割まで、例によって一時間以上待つこととなった。さきに部屋の下見をしてきた、四人のスペインのグループが、六人部屋を見つけたから、一緒になろうといってきたが、われわれの部屋は、すでにとつてあつ

る博物館に案内されて、カズベギの町や、コーカサス地方の歴史の展示物を

踊りでて大喝采を博した。
カズベギでの日程も終えて、荒涼と

会務報告

七月理事会

(七月五日午後六時本会ホールム)

△出席者 今西会長、織内副会長、板倉、伊倉、近藤、浜野各理事、望月、金坂、山崎各評議員、高遠、三枝各委員、委任 中屋副会長、松丸、丹部、神崎、堀山各理事

△議案

・台湾山岳会招聘の件 (板倉)
台湾からJACの招聘状の要望きたが、対中国との関係で困難であり、一応会長名でJACは日山協の下部団体であるから日山協よりの連絡待ちである旨の返事を出した。

・都岳連より委員依頼の件 (板倉)
了承

・ダウラリIV峰登山推薦の件(金坂)
一九七六年、桜門山岳会日本大学山岳部、隊長 尾上 昇
了承

・東海支部役員改選、規約変更の件 (伊倉)
支部長(旧) 熊沢正夫→(新) 樋口敬二、地域変更、岐阜が抜け愛知・三重の二県に
了承

・岐阜支部役員改選の件 (今西)
支部長(旧) 今西錦司→(新) 松井辰弥
了承

・会費値上げについて (伊倉)
現行会費での試算によると、昭和五十年度に予想される本会の財政状況は大幅な赤字となる。そこで会費の値上げも検討されなければならないこと、今後継続検討することとなった。

・ヒマラヤ基金財団設立について (板倉)
秋社 昭和49

この件については今後検討する。

△報告事項

・年次晩餐会の件 (伊倉)
京王プラザホテルに予約(十二月七日)、開会午後五時、会食六時から、中華料理、会費四千元
・日大ヤルカン遠征隊無事下山 (金坂)

△委員会報告 (金坂)
・高所登山 (金坂)
六月二十九日谷川岳で今後の方針相談、エネレスト許可申請だけ出ているが、期間のかりそうな調査研究を側面から支援する。先ず酸素について役

に立つような研究に入りたい。
調査研究費として本年度予算より五万円位支出することについて (板倉)
了承

・七十周年記念事業準備委員会の件 (織内)
もうしばらく待つて欲しい。近々委員を決めたい。記念事業としては山岳名著刊行、記念晩餐会、記念講演会、自然保護関係の展覧会等を考えている。

・図書 (近藤)
九月十八日に望月達夫氏を講師に山岳図書を語る夕べを開催する。
・山岳 (近藤)
出版が遅れているが、九月下旬には発送の予定。

図書室便り (昭和49・7)

新刊図書受入報告
朝日新聞社寄贈

(1)『深田久弥山の文学全集 V 日本百名山』昭和49
慶応大学山岳部寄贈

(2)『慶応大学山岳部『登高行 XⅦ 1974』昭和49
植村直己氏寄贈

(1)植村直己著『極北に駆ける』文芸春秋社 昭和49

木村康之氏寄贈

(1)横智雄先生追想集編集委員会編『横智雄先生追想集』昭和47
小暮勝義氏寄贈

(1)群馬県山岳連盟『ヒラヤ登山実行委員会』青い山脈の敵(一)DHAUL-AGIRI-IV, 1972—昭和49

定期刊行物受入報告
【部報・会報】
(1)山村民俗の会『まじなみ』No. 142 (49-7)
(2)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 86 (49-7)
(3)『ふこうの山岳会月報』No. 155 (49-7)
(4)日本地図資料協会『古地図研究』No. 52 (49-6)
(5)国立公園協会『国立公園』No. 295 (49-6)
(6)『京都中体連ワンダーフォーゲル委員会行事記録』No. 12 (73.4~74.3)

(7)京都山岳会『京都山岳』No. 591 (49-7)
(8)長野県山岳協会『山岳協会ニュース』No. 35 (49-6)
(9)東京野歩路会『山嶺』No. 531 (49-7)
(10)日本自然保護協会『自然保護』No. 145, 146 (49-6-7)
(11)低く山を歩く会『低山』No. 108, 109 (49-6-7)
(12)日本登山協会『山と雪』No. 194 (49-7)

【雑誌】
(1)『フル』No. 197 (74-7)
(2)『地図』Vol. 12, No. 2 1974
(3)『岳人』No. 326 (74-8)
(4)『岩と雪』No. 38 Summer 74
(5)『山と溪谷』No. 431 (74-8)
洋書受入報告
Korean Alpine Club 寄贈

1)『HAN KOOK SAN AK-Vol. IX 1973—』1974
【海外雑誌】

1. "Alpinismus" 1974-6.
2. "Appalachian bulletin" Vol. 40, No. 6, May 74.
3. "Die Alpen" No. 5, Mai 74.
4. "The Centerbury Mountaineering" Vol. 11 (no. 42) 1972-73.
5. "Chicago Mountaineering Club. The Newsletter" Vol. 28, No. 1, June 74.
6. "Deutscher Alpenverein" 26. Jahrg. Heft. 3, Mai/Juni 74.
7. "Der Bergsteiger" 1974-6.
8. "Mountain" No. 35, May 74.
9. "Österreichischen Alpenverein Mitteilungen" 29. Jahrg. Heft 5/6, Mai/Juni 1974.
10. "Panorama of Slovakia" 74-1.
11. "Kankoku Sangaku-kai. Kaiho" No. 17, 1974-2.
12. "Yagai" No. 64, 74-6.

ルーム日誌(49年7月)
1日(月) 集委員会
3日(水) 常務理事懇談会
5日(金) 学生部
6日(土) 青年懇談会「横 有恒氏講演会」
8日(月) 山日記編集委員会
10日(水) 学生部
11日(木) 指導委員会
16日(火) 婦人懇談会
17日(水) 図書委員会
23日(火) 学生部
29日(月) 山日記編集委員会
31日(水) 自然保護委員会

七月中来室者 四七三名
会員異動(49年7月)
終身会員
改姓
四五五三 高本 孝
六三八九 梅本知栄子 旧姓漆原
四六二五 大村 光雄
五一二二 北村 二郎
五四七七 楠目 高明

第十四回登山技術講習会

指導委員会

ここ数年富士山で行なわれて来た技術講習会を中屋副会長をはじめとする成蹊大学関係各位のご好意により虹芝寮を使用して五月十七日より三日間谷川岳で行なう。

一月から準備にとりかかっていたが、不馴れと年度末にぶつかり肝心の案内状ができたのは四月も終り近くであった。PR不足で開催があやぶまれたが十四日も続いた講習会に参加者が少ないというところだけでつぶしてはならないと担当理事の奔走でとにかく講習会は行なわれた。

五月十一日ルームにおいて五月の谷川岳等の机上講習と準備会を行なった。

五月十七日十一時現地集合、各自思い思いに新緑の中を虹芝寮目指して集まる。午後芝倉沢大岩付近で雪上基礎技術を訓練した。今年は雪が多く芝倉沢もびっしりと雪がふまっている。登山禁止解除後も五月二十日まで延ばされ旧道がけしきさであった。
五月十八日芝倉沢をつめ上級者は東尾根からシンセンを降りマチガ沢へ、

第十四回登山技術講習会を受講して

国 光 保 雄

初級者は西黒尾根から巖剛新道を降りマチガ沢へというところで、ザイルワークを訓練しながら芝倉沢をつめる、陽が高く曇り曇り、人数が少ないので、すぐにはトツがまわってきてもへばり気味、休憩の折の神崎講師の歌唱指導で何とか救われて雪庇をわけて国境稜線へでた。東尾根は雪の状態が悪く中止し、全員西黒尾根をくだる。巖剛新道の途中から一ノ沢へ入りグリースードに本谷へ降った。十二時間近いアルパイトで暗くなってヒュッテへもどった。反省会と懇親会を兼ねて越後支部差入れの朝日山をくみかわす、越後の山を愛する越後の人達の話は夜がふけてもつきなかつた。

五月十九日希望者数名は近くの雪上で復習を行ない、他の者は小屋の跡片づけを行なって午後二時全員山を後にした。

三日間晴天に恵まれ、蛇芝寮で講師、受講者ともどもの水入らずの生活、谷川岳に精通した越後支部の室賀さん、藤井さん、さらに越後の山と人生に深い味わいのある鈴木さんの参加で成果があがった反面、案内状のおくれから会員各位へ通知できなかった不手際等についてはお詫び申しあげなければなりません。これらの良い点、悪い点については近々指導委員会において検討されることになっており、別の機会に「山」に載ることと思います。

参加者 三宅妙子、富田由紀子、稲山明子、高橋広志、林秀美、国光保雄、梶春子、葛城正一、石島藤吉、講師 田村宏明、浜口欣一、堀内章雄、大倉昌身、室賀輝男、藤井信、鈴木敏雄、神崎忠男、小川武、宮原博通、山崎安治、三羽勝。

(堀内記)

五月十七日から二泊三日の日程で、谷川岳連峰芝倉沢の麓、「紅芝寮」において開催されたが、善男善女の集まりのためかそれともコンピュータのデータによる科学的な天気予報が正確であったのか、ともかくこの三日間は本当によい天候に恵まれ快適な毎日であった。

第一日は残雪期の雪上訓練ということで、歩行練習、滑落停止等の技術を習う。

二日目の十八日は、前日の復習とザイルワークを習いながら芝倉沢から登り始め、茂倉岳と一ノ倉岳との出合いの稜線までは苦しい登りだったが、国境稜線にとび出した時の眺めはなんともいいような景観でそれまでの疲れも一気にふっ飛んだ、昼食後の全員による合唱で、元気は倍増しオキの耳からトマの耳へと稜線を歩き西黒尾根からマチガ沢へのグリースードの下りの恐いことしきりであったが、無事全員紅芝寮にたどりつく、その日、夕食後の反省会のまた楽しかったこと、この上なく有意義な会だった。越後支部の講師の指揮によるコーラスで反省会も最高潮に達し、アルコールの方もかなり量に達したのと思われる。

今回の講習会を振りかえって見た場合、第一に期間中良い天候に恵まれたこと、第二に小人数のグループであったこと、講師の方と受講者の意識疎通が十分なされたことかと思えます。

最後に、講師の方々には、大変お世話になりました、とくに越後支部の鈴木、室賀、藤井講師に厚くお礼申し上げます。

図書委員会懇親会

恒例の図書委員会の懇親会が、今回は山菜を肴に地酒で一献傾けようという心になり、大橋さんの肝いりで、六月八日、九日の両日土樽山荘で開かれました。

八日の夕方、山崎さん初め旧委員の大森さん、新委員の泉さんら女性三名を含めて総勢九名が山荘に集まりましたが、着くやいなや女性陣は大張り切りで、山菜を摘もうと裏山(冬期はスキー場)へ登りました。

山菜狂をもって認す斎藤桂さんなどは、アッという間に駆け登りブッシュの中に姿を消したかと思うと、またたく間に両手一杯の山菜を抱え込んで飛びだしてきたのは一同驚きました。

夕やみ迫る頃、山荘の食堂で宴が張られ、次から次へと山菜料理の山盛りが所狭しと並べられ、山荘の主人の降男氏がいちいち名前を覚えて下さるのだから驚く、舌つみを打ち、地酒を味わいました。今年は雪が多く春が遅いので山菜も少ないという降男氏の話でしたが、地酒と共に味わわずに山菜料理は正に絶品でした。

メニューの一部を紹介しますと、ワラビのワサビじょう油、ホナのおひたし、タケノコと肉の油いため、ミズナのきんぴら、ウドのゴマあえ、フキノ煮つけ、ゼンマイの煮もの、アンニラの芽の天ぷら、マタタビの塩づけ、タラの芽の天ぷら、ウドの葉の天ぷら、コンフリーの天ぷら、等です。さらにこの会のためにわざわざ溪流から釣り上げてきて下さった岩魚が、一段と花を添えてくれました。

吾輩翁の思い出話などが披露されましたが、翁の亡き後は嫡男降男氏が引継がれ、元氣な二人のお子さんに囲まれてますます繁盛とお見受けしました。宴もたけなわとなり、場所を三階の部屋に移して、J・A・C(ジャパニーズ・アルコール・クラブ)という珍説もあるようですが、図書委員会の名に恥じないよう、夜の更けるのも忘れて飲み語り、かつ歌いました。

明けて翌九日は降男氏を越えて土合にでることにし、降男氏に愛嬢と一緒にジープで蓬沢の堰堤まで送って頂きました。斎藤さんと武田さんは山菜狩りに興じ、その他の面々は蓬沢越えにかなりました。ツエ時とは思えないような緑の香りと、春ゼミがかしましく鳴き騒ぐ中を雪だけの冷たい水で喉を潤しておいて、昨夜の酔をさしながら登りました。一抱えもある大木が根こそぎなぎ倒されているデブリを二度、三度と目の当りにして、この冬の豪雪と雪崩のすさまじさに驚きました。しかも、ヤマカガシがのんびりと岩の上で屋敷をきめこんでいたのは、確かに春がもうすっかりこまでやってきている証でした。

深い森林帯を抜けてでで、ダケカンバの渾木帯に入り、眼下に越後の里をおおきく頃になると、皆の足取りも一段と軽やかになってきました。ダケカンバ帯を過ぎると、一面の根曲り竹と笹の斜面で蓬沢から吹き上げる風が汗ばんだ肌に心地よい。タケノコの最盛期でまたたく間に両手に持ちきれない群取ってました。イワカガミの群落に目を奪われている内に峠はもうそこでした。谷川連峰から、朝日岳、巻機山など周囲の眺望は申し分なく、さわやかな風に汗をひかせながら山崎さんは満足にビールを傾け、われわれはオレンジ・ジュースでシャーベットを作り蓬沢の残雪を存分に味わいました。

東面の沢筋には未だかなりの残雪があり、グリースードや返って武能沢に駆け下りました。雪どけ水を集めて、とうとうと流れる湯掛曾川に沿って、イタドリをしゃぶりながらフキを摘んだり、純白のユブシの花を見やりながら土合橋まで下ってきた時、われわれの時間に合わせてかのように水上行のバスが下りて来てくれたのは本当に幸運でした。

水上から近藤さんは一人武尊山に旅立たれ、われわれは斎藤さん武田さんが摘んでこられた山菜をお土産用にどつき山分けして貰い、夕やみ迫る谷川連峰を車窓に見送ったのでした。

最後に大変お世話になった降男氏はじめ土樽山荘の皆さんに改めてお礼申し上げる次第です。

伊 藤 博 夫

支部便り

「語ろう会」開催報告

熊 本 支 部

熊本支部では毎年春秋二回の例会を開いているが、今年はさきに春の総会を開いたばかりであったが、主に熊本市内在住の会員を主体に支部会員相互の親睦と理解を一層深めるため「語ろう会」と題して親睦会を開いた。

当日は北九州市八幡の仰木政次郎氏(元会員)、東九州支部の三谷忠一、木本善重の両氏および地元熊本アルコウ会から六名の参加があつて出席者十九



午後二時という時間がいささか勤めのある人には迷惑であったろうが、それぞれ都合がついて会員の中には大牟田市や荒尾市からも出かけてくれた。支部から挨拶の後乾杯、そして出席者の紹介に移り各人一言ずつ経歴を披露していただいた。

名となり、去る六月十八日午後二時から会員宮崎豊喜氏の経営する熊本市内の観光レストラン山小屋の従業員寮応接室に集って盛会のうちに終了した。前日からのどしゃぶりの雨がこの日も残り天候が危ぶまれたが、幸い病室中の会員一人を除いて市内在住会員全員の出席があり、日頃例会に出席できない会員諸兄の顔もみられ懇談できたことは、この会を開いた主旨の一つが充されたものと思う。また、県外の方には多くの方を招待したが、とくに会場を提供された宮崎豊喜氏の知人として福岡支部長末松大助氏と仰木政次郎氏および三谷熊本支部長の兄にあたる東九州支部の三谷忠一氏を招待したところ、末松大助氏の出席ができなかったことは残念だったが、前記三名の方が天候悪しき中にもかかわらず遠路出席されたことは嬉しく思った。

また熊本ブルコウ会は、熊本で早くから（昭和八年創立）歩け歩き運動を起し、登山と歩くことによって健康を増進し剛健かつ達の気性を養いおよび自然愛好の情操を培う目的（当会の会則）をもって結成している大衆登山団体であり、以来毎月一回の例会を欠かしていない。支部会員の中にもこの会の会員多数がいて、この日は日頃懇意にしている方々およびJ・A・Cに入会を希望している方々を招待したところ六名の出席があった。

そして自由懇談に入る前、宮崎豊喜氏から山岳遭難に対する家族の悲劇談など彼が見た切実な感想を披露された。あとは各人自由に懇談し、宮崎豊喜氏の肝入で珍らしいスナイス料理がだされ、アルコールの方は飲み放題とあつて十分ご馳走になり、木曾節や黒田節がでた頃はすっかり皆さん上気嫌であった。

ほとんどの方が顔見知りであるためか時間がたつのも忘れ、万才したのは午後八時過ぎ、お互いに十分懇談でき一応の成果があったと思う。しかし、九州の支部は低調であるという観念を一掃したく何とか魅力のある催し、あるいは東北や中部地区の支部にみられるように何か特徴のある催しをしたいとかねて考えているが、要は会員の出席が悪ければ何もできないので、まずは地元会員の足固めから始めることにした。こうしたのもでもプラスになることであれば幸いである。さらに願えば一度手がけた九州三支部の合同懇談会を機会をみて早い時期に開催してはと思っているが、関係者のご協力をお願いしたい。

東海支部報告

浅見 正 夫

一九七三年四月十五日に東海支部の総会が開かれた。七二年年度の支部運営にあたってきた委員は、今までのように支部費を徴収して事務員を雇い、行事の案内状をいちいち印刷して郵便で支部員一人一人に連絡していたのは、それだけ莫大な経費を要するだけなく、このような形で支部の運営を維持するには時間の上でも労力の上でもあまりに一部の会員に負担がかかりすぎる、そのわりに一般会員の支部への関心が薄いことを考えて、七

三年度は組織を簡略縮小し、行事も行なわず、かわりにこの十余年の東海支部の資料を少しずつ整理することを中心とする東海支部休会案を提出したのであった。

ところがどうも誤解されたのか、東海支部をつぶすのはよくない、それなら私が全面的に責任を持って支部運営にあたるから私にまかせられたという人が総会場であらわれたので、それならおまかせしましょうということになったのであった。この経緯について「山」三三七号に中世古隆司氏の文章が掲載されている。

しかしその後東海支部は一度も集会や山行がおこなわれず委員会さえ一回も開かれないうち状態になってしまったのであった。七二年からの会計のひきつぎもおこなわれず、個人的好意で一個所に集められている蔵書、資料、備品なども放置されたままになってしまった。

会員の一部はこの状況を憂慮し、有志は金と時間を割いて蔵書、備品の管理にあたることも過去の資料の整理をはじめた。そしてこの現状を反語的に「東海支部解散論」という文章にして「山」に投稿したのだが、説明が不十分であったためか無用の混乱を生じさせないようにと本部の配慮から不幸にも没書となってしまった。

東海支部資料の整理は受発信物の集成が一段落してまもなく製本される見通しとなり、現在（一九七四年六月末）写真を整理中である。

一九七四年三月十四日、有志は前支部長熊沢正夫氏宅を訪れ、今までの事情を分析し今後の東海支部運営について話し合った。有志の間では、この一年間支部は実質的には休会していた、七四年度から連任を前提として新体制で支部を再開する、この二点が確認された。この席には七三年の実務上の

責任者も呼ばれ、議論がおこなわれるはずであったが、結局彼からは何の見解、意見も示されず、ただ有志の発言に対する全面的同意が示されただけであった。同時にこの会で支部再開の準備のために事務所を現事務所（名古屋市中昭和区鶴舞町四ノ六ノ七 グリーンハイツE-1 池沼慧方）に移すことが決められた。また、この時熊沢氏からはすでに六年間支部長をやってきたので、このあたりで支部長を交代してはどうかとの示唆があった。その後新支部長を樋口敬二氏に依頼したところ快諾を得た。

支部再開のための総会が六月十六日に開かれることになり、「山」を通じて全会員に通知された。

以下は総会の議事録である。

日時 一九七四年六月一六日

一六時一五分～一七時

所 愛知果敢労働会館

出席者 浅見正夫、伊藤行人、樋口敬二、原真、山崎安治、伊倉剛三、石本恵生、神崎忠男、馬場和一、後藤敏宏、郡正也、池沼慧、筒井稔、熊沢正夫、松井宝一、蟹江武士、原田豊、加藤和美、湯浅道男

議事 会は浅見の司会ではじまった。はじめにこの総会開催までの約一年の経過について浅見から前述のような説明があった。

ついて原氏からこの集まりが総会として成立するかどうかを確認した方がよいとの発言があり、この後しばらく規約の問題が議論されることになった。

伊倉、山崎両氏からは、本部の意向としては支部設立の時以外は支部の運営については規制しないつもりであること、何らかの意志表示のない会員は委任とみなしたかどうか、本部でも欠席者は委任とみなしていること、などの説明があった。厳密に規約にしたが

えば実に窮屈なことになり会の運営は事実上できなくなる、それよりある程度あいまいであっても大局的見地から実効のある方向にことを運ぶべきであることが論議され、この会については総会として行うことが確認された。議事録を「山」に掲載することになった。そしてここで決定されたことは支部の決議となることが確認された。

このあと浅見が議長となって後述のような七四年度の支部役員が選挙され支部規約改正案が承認された。支部規約変更の要旨は、岐阜支部設立による東海支部包含地域の修正、事務所所在地の変更、役員構成の改変、会費徴収に関する条項の削除などであった。規約上、のちほど委員会が開かれて新支部長、常務委員が正式に決定される予定である。

さらに前支部長熊沢正夫氏が名誉支部員に推せんされ、満場一致の賛同のもとに氏がこれを受諾された。東海支部初の名誉支部員が誕生した。

事業計画については、総会と「秋の御在所で焼肉を食う会」の二つを東海支部恒例の行事として行なうことが決められた。

最後に山崎安治氏から、東海支部はいつかはつぶれるのかと心配したがどうやら無事に維持されていくことになったようで一安心であるとの挨拶をいただき総会を終了した。

一九七四年度東海支部役員

樋口敬二（支部長）、池沼慧、浅見正夫（以上常務委員）、国島陽三、石本恵生、郡正也、蟹江武士、石川博（以上委員）後藤敏宏（会計監事）

※本部との連絡には常務委員があた

る。

日本山岳会東海支部新規約

（変更箇所のみ）

第一条 本支部は、社団法人日本山岳会東海支部という。（ただし、当該

地域を愛知三重の二県とする。)

第二条 本支部は、事務所を名古屋市中昭和区鶴舞町四ノ六ノ七グリーンハイッー池沼慧方下野宅におく。

第五条 本支部の会員は、次のとおりとする。

- 一 通常会員 日本山岳会会員であつて本支部の目的に賛同する個人または団体
- 三 支部友 委員会の推せんによる個人
- 四 準会員 日本山岳会会員ではないが、本支部の目的に賛同する個人

第九條 本支部には次の役員をおく。
委員 若干名(うち支部長一名、常務委員数名)

會計監事 二名以内

第十條 役員は、通常会員のうちからこれを選挙する。委員は、互選により支部長、常務委員を選出する。

第十一條 役員の任務は次のとおりとする。支部長は、本支部の業務を総理し、本支部を代表する。常務委員は支部長を補佐し、総会および委員会の決議にもとづき本支部の業務を執行する。委員は委員会を構成し、本支部の業務について審議する。會計監事は、支部会計を監査し、毎年総会に報告する。

第十二條 役員の任期は次のとおりとし、再任を妨げない。
支部長 三年

その他の役員 一年

第二十條 総会の議決事項および議事の要項は「会報」(日本山岳会)または「東海支部報」によって会員に通知する。

第二一條 本支部の事業遂行に要する費用は、本部から支給される運営資金(会費の支部還付分、寄付金、事業に伴う収入および資産から生ずる果実等をもって支弁する。

第三條 八削除V
(第二三條以降は条項の番号が一つずつくり上がる)

第二五條(末尾に追加)
第三次改正は、昭和四九年六月十六日から、これを施行する。

お知らせ二件

①信濃支部

全国支部長懇談会兼現地小集会

時 一九七四年一〇月二日〜三日
所 二日ー中房温泉 支部長懇談会
三日ー燕岳を往復
集合 二日 中房温泉
会費 六、〇〇〇円

申込先 日本山岳会事務局
締切り 九月三〇日
その他 定員が八〇名につき、満員になりましたら締切らせていただきます。

②東海支部

焼肉と岩登りの集い

時 一九七四年一〇月二六日〜二七日
所 御在所岳

集合 御在所岳裏道日向小屋(一〇月二六日(土)午後六時
会費 三、〇〇〇円(予定)

申込先 千四六六

名古屋市中昭和区鶴舞四一六一
七 グリーンハイッー
池沼慧方 日本山岳会東海支部へ葉書で申し込み下さい。
締切り 一〇月一五日

その他 登攀用具をご持参下さい。
食料、酒持込み歓迎。

協力 集委員会
高所登山委員会

空港には、グルジャ山岳会会長タマリ氏はじめ、すっかり友達になったアギ、レズ、オズ、チト等が見送りにきてくれた。レズが私達二人にと、グルジャの地酒をプレゼントしてくれたものが、この地酒は大変な強さで、さしもの強豪連も顔をしかめた代物である。しかしこれを日本に持ちかえったところ、一時間足らずのうちに全部空にしてすでに会務報告などで存知かと思いますが、一九七九年ポストと、一九八〇年プレ・モンスーン両季に、南西山からエベレストの初登頂を目指す登山計画について、ネパール政府あて登山許可取得の申請をすることが理事会を経て正式に承認され、六月二十六日、都呂連経由日本山岳協会あて計画書などを提出いたしました。

てしまったのは、本会の山崎安治氏であつた。

トピリスを飛び立った飛行機の窓から、雄大なコーカサスの連峰が雲の上に姿を現わし、その直ぐ後ろにエルブルース（五、六四二m）がひとときわ高くそびえていた。そして飛行機は小雪のちらつくモスクワへ向つていった。

ありました。

その後、各国の注目を集めた南西壁は七一年春の国際登山隊（會員植村、伊藤岡君参加、七二年春ヨーロッパ登山隊、七二年秋英國隊、七三年秋のRCC II隊と試みられて、高度差こそ頂上へ五〇〇m近くまで迫つたものの巨大な南西壁の核心部といわれる八、〇〇〇mから上の垂直な岩壁には、誰も手を付けていない現状であります。そして今後、エベレスト南西壁を目指す計画は一九七四年秋のフランス隊、七五年秋の英國隊、七六年秋のフランス隊、七八年秋のドイツ・オーストリア合同隊、七九年春の英國隊と目白押しにならんでいます。

このような情勢の中で、一九六九年に初めて南西壁を試みたわれわれ日本人の手で、なんとか初登攀したいという気運が盛り上つてきたのもごく自然の成行といえます。

すなわち、昨年から会の高所登山委員会を担当して居る原理事を中心とする東海地区の人達、悪天候のため充分な力を發揮できなかったRCC II隊、学校創立百周年を記念する明治大学山岳部OB会、そして前回のエベレストに参画した人達など、南西壁へのあこがれを心中秘かに強めてまいりました。

私は、この日本国内に湧き上つてきている南西壁への志向をなんとか集結し、総力をあげてこれに挑戦する方法

はないものかと考え、各方面の方々の
お考えを伺い、ここに日本山岳会（日本山岳会）の組
織と伝説ある英知を基盤にすぐれた登
山隊を送ることが、日本山岳会の将来
に寄与することも大であると信じ、こ
の計画の第一歩を踏みだした次第であ
ります。

正直申しまして決め手になるタクテ
ィクスや新兵器も、また資金や隊員
の目途もなく白紙の状態であります。
もっとも早い登山許可を取得できたと
しても五年先の七九年秋であります
が、準備期間として決して長いとは考
えておりません。この間に解決してい
かなければならない問題は山ほどあり
ます。具体的なことが決まり次第、逐
次「山」誌上で報告いたしますが、当
面この一年間とはくに組織をつくら
ず、計画の策定に必要な研究、調査を
地道に進めたいと考えております。

今後、会員諸賢の心からなるご協力
とご指導賜わりますようお願いいたし
ます。

（宮下秀樹）

会津の山 ②

「高旗山」

越後支部 市村貞夫

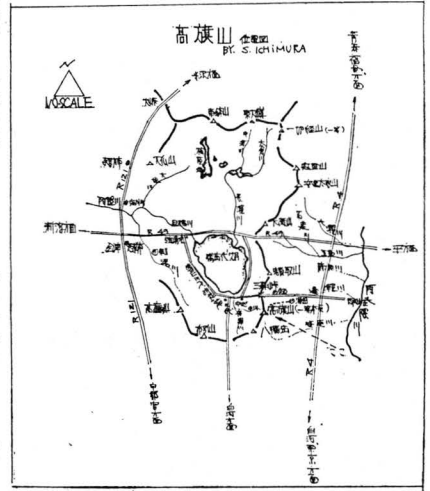
高旗山は、福島県のほぼ中央に位置
し、奥羽山脈の地域に属し、猪苗代湖
から裏磐梯に達する地溝状の猪苗代盆
地が南北に走る。猪苗代南方に、額取
山、八幡岳、会津布衣山へと稜線は走
っている。これが猪苗代湖に注ぐ舟津川
である。また阿武隈川と阿賀川水系の分水嶺で
ある。



高旗山山頂における成瀬氏
(撮影は筆者)

もあり、地籍上は郡山市に入るが、町村合併で耶麻郡猪苗代町から郡山市に入籍した。行政上はどうあれ羽越三角網に属しており、立派な会津の山である。

頂上付近は広葉樹に属する、ナラ、ミズナラ、トチ、クリなどの粗林が広がり、生育も良い。稜線部には松が至るところに点生している。中腹部には営林局施業区域で以前に植林された、マツ、スギ、が太木に成長し見事である。地質的には新第三紀層に属し、頂上付近には、いたるところ花崗岩が露頭している。沢の中には上流から流送された大転石が至るところでゴロゴロしており、流水は被圧された地下水でにこりもなく冷い清水であり音を立て流れている。岩魚の姿は見つけることができない。沢筋の空地には炭焼窯の跡が数箇所あり、薪炭を産出していたらしい。登山者にとって親しみのあった炭焼の



トツツアン(方言)親父も、エネルギー革命の波に押し流され、山仕事がなく出稼ぎとして山村をでた。こんな静かな山村まで、入り込むとは登山者に限らず、ちょっとさびしい風景である。

高旗山は北の吾妻連峰一切景、南の那須連峰三本槍岳を結ぶ中間点である。この二峰には登山者が多いが、本峰については訪れる登山者も郡山市の地元山岳会か、山菜取りの農家の人々、営林署の山岳監視員が入山しているくらいで、登山を目的として入山する者は本当に少ない。これには登山道、標識の整備がなくあわせて高旗山は安積平野からは見られるが、会津盆地からは望むことができず高山に登り、その山姿から高旗山を探しだす。あわせて交通不便もたつてきた。この原因で現在まで取残され静かさを保つていたようだ。自然環境保全上からも会津の山として残して置きたい。

山頂は野芝に覆われており、面積は小さく、展望は視界は雄大である。眼下には満々と水をたたえた、会津観光のドル箱猪苗代湖、湖面を驚きかう遊覧船の遠景と、会津の名山磐梯山の美しい姿、遠く一段と高い雪をつけた飯

豊連峰が視界に入っている。一等三角点十五号の標識石、誰れが奉納したか知らないが、こけむした石祠が一つあり、あとは何もない。ゴミひとつない清い頂上である。芝生の上で昼寝でもしたらさらに山の深さが倍増されるでしょう。日本百名山、深山久弥著に依れば二番磐梯山「私の得た最もみごとな眺望は、湖の東南側にある額取山から高旗山に続く丘陵山脈上からであった。その高所から猪苗代湖の一大円鏡を見下し、その彼方にいさぎよい形で立った磐梯山を眺めたが、これほど美しく美しい磐梯山は初めてであった。」とその感想を書かれておられた。また山麓には民話、伝説、温泉場があり詩情あふれたところで、東北でも第一位のランクにある「脱腸の名湯」として知られ開業以来百五十年を誇る源田温泉、会員が世話になる熊田屋旅館一戸があり、周りには桜の木が多く四月であれば満開である。

このカミさんが安積出身の美人である。伝説も一つだけ紹介、高旗山の山名起因は源九郎義経がみちの入り際に際し、高旗山に登りて戦勝祈願として勝旗を掲げた、と郷土史研究家からうかがった。この静かな山旅と温泉場、民話、伝説、自然探勝と豊富なテーマをもち合わせた一等三角点、高旗山を紹介したい。先輩諸兄の試登をお願いする。(七四・四・二七)

◇アプローチ

・会津若松磐越西線下車駅バスセンター発三森ライン經由郡山源田温泉下車
・東北本線郡山駅下車福島交通、休石温泉会津若松行下車口同じ
・源田温泉より沢コースのみ上り二時間半、下り二時間

海外からのたより

カラカスより

吉沢 一郎

生れて初めて、夢にも思わなかったオリノコ河というのを一九七四年七月四日午後三時十分に乗らみましたが、そこはカラカスの南方、直線にして三〇〇Km、ハイウェイでは四〇〇Km、車で六時間のカブルータというところで、河は雨季のため濁っています、流れはどっちに向いているのかわからない位悠々迫らぬものがあります。それでも流れています。幅はここです約四Km位でしょう。

斜め下流の対岸にカイカラがあります。そこで渡船で渡りました。モーター付で約四十分、気温三十五度C東京の同温度とは凄く暑いですが、それでもやはり暑い。カイカラのホテルは各部屋冷房つきとはいえず、他はまことに粗末。どんな所へ行っても人間が住んでいて何かをやりながら毎日生活しているところとは思えません。

探検隊の全員元気、みなこの老人をよくいたわってくれ、細かいところまで気がつかせてくれるの本当に有難いと思っています。食糧やガソリン、マチェーテ(ナタ)、ハンモック、蚊帳などを仕入れてました。私は向君、今村君、大川ドラク、堀君などとゴムボート(デイクアック)に乗ってオリノコの中流にある中州へ行き釣りをしました。私にピラニアを見せたいという配慮からです。中州にはパンチ(黒豚)を飼っているオッサンがいました。天涯孤独の生活をしていられるらしい。浅瀬のところでみなで糸を垂れました。水が濁っているのよくわかりませんが、ウヨウヨいられるくらいに引きま

す。しかしなかなか釣れません。とうとう私が大きいのを釣り上げました。うすべり、たいてい魚の腹の下の方が赤くなっています。針をとる時には靴でふんずけてやらないと指をかまれてしまいます。とにかくピラニアの本物を釣り上げたんだから大したものでしょう。ここにはカリーベ(雁部)というピラ公よりすごいのがいるそうです。そういう地名もあります。

七月六日、全員カイカラから対岸のカブルータ(アラブ系の地名)へ戻り(約一時間)ガソリンを積み込んで、午後二時十分、出発、ボート二台、カナ一、二トンの荷物を積んで上流へと向いました。これです、これまでいろいろの苦心がみのつたわけですが、動植物班も持ちだし許可の問題で苦労しました。が今は全部解決。私はみんなが波頭で見えなくなるまで、真黒な土人の子供達と一緒に見送っていました。もうこれで半年距離ハイヤーに乗り(依田、三村、川上の三君と共に)カブルータをあとにしました。気の遠くなるほど真直ぐにのびているハイウェイをカラカスに向うのですが、往きの経験済みなで覚悟はできていました。もうおなじみのチャグワラマソンプレロを経て、あれがカラカスの燈だといったのが午後八時、それから一時間都市街に入りました。田舎運ちゃん町を知らずでカラカスのセントロをウロウロしながらやつとホテル、ラス・アメリカに辿りつきました。とにかく一方通行が多いので目と鼻の先のところへ行くのにも大廻りをしなければなりません。どこへ行ってもコーヒのぬるいのは困ります。ムイ・カリエンテといつてもダメです。町の周囲の斜面に不法占拠の小屋が沢山あります。お巡りさんは月給が安

いからそこに住んでいるのが多いそうです。それについて面白い話があるんですが、公けには書けないので私に会ったら、このことを話せと催促して下さい。

カリブの海にも行きましたがとても暑い暑い。しかしカラカスは山の盆地（九〇〇m）にあるからむしろ涼しくて過しやすいです。

これからボゴタへ飛び、リマからワラスの谷川さんを訪ね、リマからエール・フランスで羽田へ戻ります。着は二十五日頃の予定にしています。

（山）編集部宛 一九七四・七・七

『山岳』第六十八年について

このところ『山岳』の刊行がおくれて読者のみなさまにご迷惑をかけてきたが、第六十八年もまた種々の事情から遅刊のやむなきにいたったことは、まことに申し訳ない。ようやく校了にこぎつけたので、まもなくお手許にお届けできるとおもふ。第六十八年の目次を紹介するとつぎのとおりである。

○ヤルン・カン初登頂 樋口明生
○ナンバ初登頂 松島静吾
○ガンガブルナ（一九七二年） 清水澄

○ユルディアル・レアル 川久保芳彦
○秩父宮殿下の思い出 アーノルド・ラン

○アルプスのあの日あの時 佐藤久一朗

○スイス・赤毛布の旅 成瀬岩雄
○伊藤孝一氏の足跡 上田竹三

○付 積雪期北アルプス縦走の新資料 小野幸
○石井鶴三先生のこと 山崎安治

○追悼 鳥山徳成（松本善） 田部重治（茶谷東海） 佐々木健太郎（佐藤テル） 山下一夫（渡辺公平） 小

平澤（藤島敏男） 川喜田壮太郎（藤島敏男） 足立源一郎（松本熊次郎） 荒巻広政（福田文二） 諸岡一（小野幸） 三井松男（百瀬舜太郎） 木津誠一（若林啓之助） 岡村精一（山崎安治） 井本貴子（須田紀子） 垣内政彦（山崎安治）

○図書紹介
遥かなる未踏の尾根（中島寛）
マナスル西壁（松永敏郎） 山の思想史（辻莊一） 探検と冒険（渡辺興重） ヒマラヤ関係図書目録（松田雄一） ギャルを結ぶとき（阿部和行） Travels amongst the great Andes of Equator, Ney Elias Antisuyo-The Search for the Last Cities of the Amazon, Yitchamba-Last City of the Incas（以上四点、吉沢一郎）

○会務報告
○日本山岳会定款および細則
○英文梗概
○図版・写真、多数収載

『山岳』は日本山岳会の伝統ある機関誌であるだけに、編集者の責任は大きい。ここ十数年間、海外遠征記録を中心に内容の選択がおこなわれ、充実した誌面がつくられてきたのだが、一般会員からの批判がないわけではなかった。そこで今後の『山岳』編集のあり方をめぐって懇談会をひらいたことがあった。五月十五日、島田興、金坂一郎、山崎安治、坂本矩祥、伊倉剛三、宮下秀樹、横山厚夫、雁部貞夫、高遠宏、編集側から望月達夫、中島寛、近藤信行らが参集して具体的な話し合いがおこなわれた。編集委員会としてはたいへん有益な意見をきくことができたし、今後の総合的な編集にそれを役立てたいとおもう。会員諸氏からいろいろと『山岳』についての感想をお寄せいただければ幸甚である。

（山岳）編集部宛

消 息

図書委員会では七月十七日夜本会ルームでさきほど退職された影山笑子さんとカンバックした東満つ子さんの歓迎会を開き、影山さんには「中日大辞典」を記念に贈呈、委員多数が集まりまことに盛会でした。

× 本会前職員小林光子さん（旧姓佐々木）は七月五日、無事男子を出産されました。

あとがき

夏山はいかがでしたか。小生八月十七日高尾発、近藤信行氏と同道で鳥水の槍ヶ岳ルート探査に出かけました。沢渡泊。十八日快晴に恵まれ沢渡を溯行し、本谷のついで野営。十九日、本谷をまっすぐめ沢沢頂上直下でまた野営。三日目の二十日沢沢頂上に立ち、八右衛門沢を下り、山研に着きました。何しろ全く道などなく、クマの糞やクソの中を物凄い急なヤブ漕ぎで、途中水もなくしごかれました。いざれば本誌上にくわしくご報告したいと思ひます。（山崎安治）

× 本誌に使用したカットは小野幸氏の提供によるものです。（編者）

昭和四十九年九月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一
利根川商事株式会社ビル

発行所 法人 日本山岳会
発行者 今 西 錦 司
編集代表 山崎安治

（813）二二八六（代表）
振替口座東京四八二九番
東京港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技 報 堂

巨大な研究足跡を体系的に集大成！
日本が世界に誇る「今西学」の全貌を初めて明らかにする各界待望の個人全集、誕生！

今西錦司全集

講談社版 全 10 巻



■編集委員
伊谷純一郎 上山春平
梅棹忠夫 吉良竜夫
桑原武夫 森下正明
9月上旬刊行予定
●予価各2,200円

生物の世界・山岳省察・山と探検

●予約募集中！

- 全巻編成
- 第1巻 生物の世界・山岳省察・山と探検
- 第2巻 草原行・遊牧論そのほか
- 第3巻 ヒマラヤを語る・カラコルム
- 第4巻 生物社会の論理
- 第5巻 人間以前の社会・人間社会の形成
- 第6巻 御崎馬の社会調査・村と人間
- 第7巻 ニホンザルの自然社会・コリラ
- 第8巻 日本山岳研究
- 第9巻 私の自然観・自然と山と・そこに山がある
- 第10巻 私の進化論・私の履歴書

講談社

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

かんあおい

山下一夫著 <A 5判>定価2,600円

遙かなる未踏の尾根

マカール1970年
日本山岳会東海支部
<B 5判430頁・カラー64頁>定価4,800円

シブトンの自叙伝 未踏の山河

大賀二郎・倉知 敬訳
<A 5判440頁>定価1,900円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 <菊判584頁>定価2,500円

森林・草原・氷河

加藤泰安著<A 5判482頁>定価1,500円

山の古典と共に

大島堅造著<四六判280頁>定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著
<A 5変型判340頁>定価1,200円

我がスキーシュプール

麻生武治著<B 6判388頁>定価3,400円

山 岳

日本山岳会編
<A 5判>

67年 2,500円
66年 2,300円
65年 2,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
総索引 1,000円

山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編
<A 6判126頁>1集240円・2集280円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 <B 6判202頁>定価480円

日高山脈

北大山の会編
<菊判362頁>定価2,200円

原野から見た山

坂本直行画文集
<B 5箱入布特製本>定価4,200円

雪原の足あと

坂本直行著<B 5判206頁>定価2,800円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖
<A変型208頁>定価3,600円

いろいろばた

南会津山の会
<B24どり判320頁>定価1,900円

すこし昔の話

初見一雄著<四六判400頁>定価1,200円

ブータン感傷旅行

小方全弘著 <菊判280頁>定価980円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 <A 5判350頁>定価900円

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

- 買いやすい
山の店
- 北へ来たら
山の店
- フレッシュな
山の店

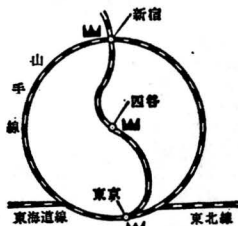
山とスキーの専門店

片 桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

なるべく なんにも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要するものがある。
なにしろ人間ですから
そして、登山ですから
どうしても必要なもの
をこしらえてやる
責任はもっています

かたるギンティ
でん 281-8456
中央区・八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区豊船町1-11 47 (364) 0933 (代)
福岡店・市 崎 町 1-4 (28) 34440

